

# 中近笠鉾

ミニガイド

第一集（令和元年補訂版）二版

国指定重要有形民俗文化財  
国指定重要無形民俗文化財  
ユネスコ無形文化遺産登録

## 中近の呼称

中近（なかちか）の町名は、中村、近戸両町で奉仕する所から来ていますが、古くは「中村」でした。いつ頃から「中近」の呼称が成立したものか定かな事はわかっていません。

秩父地方の曳山は、踊りなどの芸能を演ずる「屋台」と神道に基づく「笠鉾」に大別され（かさぼこ、と濁るのが本来の呼称）中近はその両方の構造を持った複合体で「屋台笠鉾」と呼ばれる大変珍しい様式です。

ただ中近の屋台は、内室式と呼ばれる新しい形式で芸能の要素は持っていないません。

中近は毎年十二月三日の秩父夜祭りに曳行される六台の笠鉾、屋台の一つで、秩父夜祭りの起源については秩父神社の古記録に寛文年中（1661〜73）との記述があり、これを基に「350年の伝統」と伝えられています。

ただ、現在の笠鉾、屋台の創始については、その後の資料から享保年間（1716〜36）とする説が有力で、いずれにしても「300年の伝統」があります。

夜祭りでは秩父神社より御進発の触れ札を授かり、御神幸祭を一番組として、附け祭りの先頭を供奉します。

## 中近笠鉾の創建と変遷

正徳 2年（1712）五層の笠鉾となる（祭礼日記）

安永 4年（1775）「中村笠鉾」の記載（祭礼費取立帳）

寛政 7年（1795）妙見地内に三階に飾る（同）

寛政 11年（1799）屋台行事禁止（寛政の改革）

文化 6年（1809）屋台行事復活

文久 3年（1863）秩父地方初の登勾欄（のぼりこうらん 一般的には階段）付設、高欄青白龍彫刻新調

明治 13年（1880）屋台笠鉾完成、現在の容姿が整う（これにより旧笠鉾を同三十年、秩父市栃谷に譲渡、栃谷の祇園では現在もこの笠鉾を曳行している。）

明治 44年（1911）笠鉾の曳行順路に電話線が架設される

昭和 37年（1962）大正3年（1914）には、電灯線架設

昭和 42年（1967）夜祭の笠鉾、屋台6基が国の重要有形民俗資料となる

昭和 50年（1975）埼玉国体の折、昭和天皇、香淳皇后両陛下ご奉迎のため笠鉾、屋台6基を飾置、以来各町会とも「賜天覧」の札を掲げている

昭和 54年（1979）笠鉾、屋台6基が国の重要有形民俗文化財と改称

昭和 54年（1979）「秩父祭の屋台行事と神楽」として国の重要無形民俗文化財に指定される

平成 28年（2016）ユネスコ無形文化遺産に登録

現在の笠鉾は明治13年（1880）に造られました。

名工荒木和泉の傑作です。構造は八棟造りの屋型の上に、三層の花笠（笠鉾）を立てた、大型の笠鉾で勾欄には龍の彫り物が巻き付いています。

明治 44年（1911）の電話線架設以来、花笠を立てずに曳行されています。



正面側の御幣

御幣

せき台（御神座）  
上辺90cmの台形の箱に  
持送りを付し金色の祥雲を刻む

万燈（まんどう）  
幅80cmの枠に障子を嵌め  
夜間はローソクを灯す

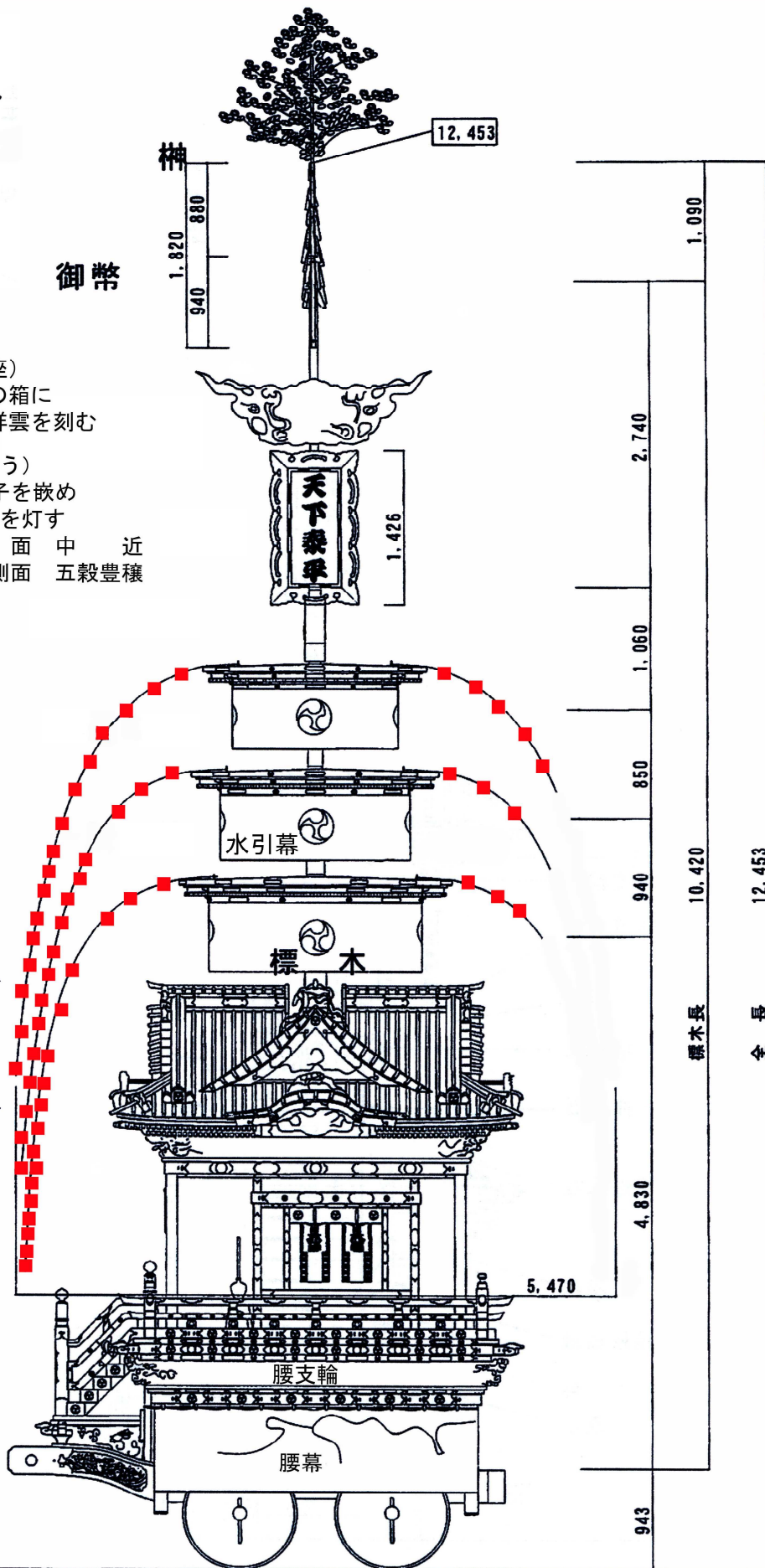
正面 秩父神社 後面 中 近  
左側面 天下泰平 右側面 五穀豊穡

三層笠 直径2.1m  
4.5mの竹ひご64本に  
各16個の花を飾る

二層笠 直径2.3m  
4.5mの竹ひご72本に  
各15個の花を飾る

一層笠 直径2.5m  
4.5mの竹ひご96本に  
各18個の花を飾る

花の総数  
竹ひご232本に  
3832枚



屋台正面 2.9m 屋台側面 4.8m 総重量 15t

囃子方 20名 曳き手総人数（上方、下方を含む） 200人

中近笠鉾の特徴

- ◎ 軒唐破風、入母屋造り、千鳥破風を付けた八棟造りの屋型。
- ◎ 勾欄に巻き付いた龍の彫刻。
- ◎ 標木を囲む内陣風の内室は、鉾の神聖さを強く表現しています。
- ◎ 宮殿風の構えで四方に御簾を吊り、その外郭にそれぞれ極彩色の彫刻で飾っています。

内室の周囲には、二十四孝（中国で古今の孝子二十四人を選定したもの）のうち我が国でも知られている、八孝子が刻まれています。

【正面右】 孟宗（もうそう）

病床の母が望む筍を、雪中の竹林で掘り当てたという故事

【正面左】 唐婦人（とうふじん）

年老いて歯が無く食べる事が出来ない姑に乳を与えている構図

【左側面前】 董永（きんえい）

貧しくて父の葬儀が出来ず、自分を売り葬儀をしようと主家に行く途中。美女に会い、その美女（織姫）が妻となり機を三百疋織り上げて孝行息子を助ける故事。

【左側面後】 郭巨（かつこ）

家貧しく、妻と共に子を殺して母を養おうと、穴を掘ると黄金の釜が出て母子ともに養う事が出来たという故事。

【右側面前】 虞舜（ぐしゆん）

父母のために精出して働く。鳥や獣までその孝心に感じ、象が来て田畑を耕し、鳥が来て草を取り、その労を助ける構図

【右側面後】 楊香（ようこう）

虎が来て父に襲いかかろうとしたが、虎の首にすがり「父を助けて私

を食らえ」と言った。虎もその孝心に感じて山に逃げ帰ったという故事

【後面右】 江華（こうか）

父に死別、家貧しくとも良く母に仕え、戦乱の世に母を車に乗せて隣国に難を逃れる有様。

【後面左】 剡子（えんし）

年老いた父が眼病にかかり、鹿の乳が眼病に効く事を知り、鹿の皮を着て、鹿に近づき乳を得て帰ったところの構図

【正面右】 孟宗



【正面左】 唐婦人







【右側面前】 虞舜



【左側面後】 郭巨



【左側面前】 董永



【後面左】 剡子



【後面右】 江華



【右側面後】 楊香



屋根飾り上部（鬼板<sup>おにいた</sup>）、下部（懸魚<sup>げぎょ</sup>）

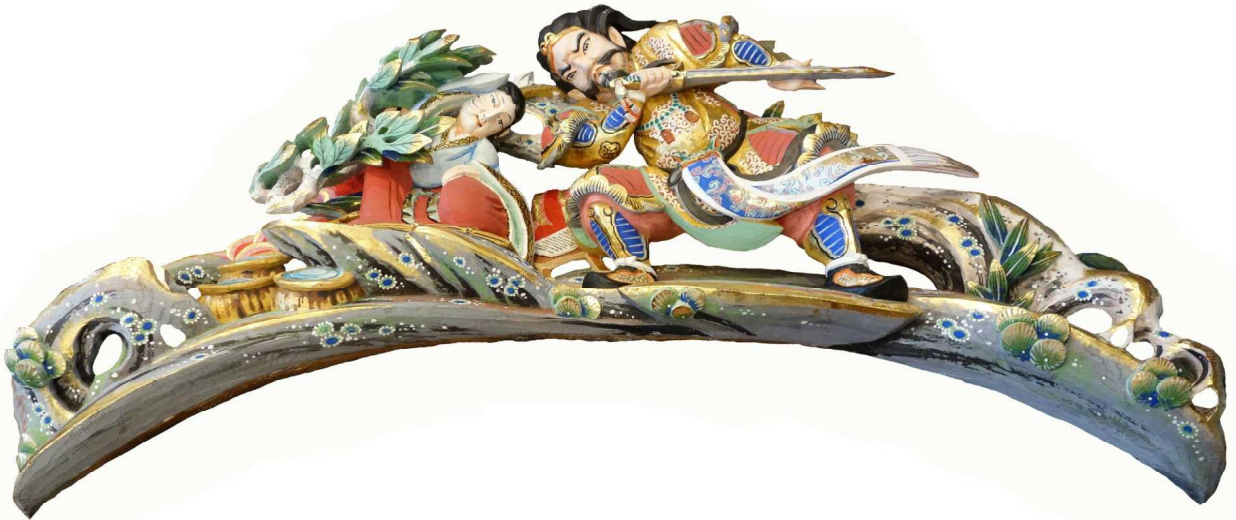
正面唐破風鬼板の彫刻

素戔鳴尊<sup>すさのおのみこと</sup>の八岐大蛇<sup>やまたのおろち</sup>退治は誰でも知っている神話ですが、中近では正面の鬼板にその彫刻が施されています。

彫刻は、素戔鳴尊と奇稻田姫<sup>くしなだひめ</sup>そして酒樽の正面鬼板の彫刻ですが、では八岐大蛇はどこにいるのでしょうか？

その一体は鬼板の下部に取り付けられた懸魚に大蛇（龍）が彫刻されています。

さて残りの七体の大蛇（龍）はどこにあるのでしょうか。千鳥破風周囲の彫刻をじっくり鑑賞すれば見えてきます。



正面唐破風懸魚（龍・八岐大蛇）

右側面唐破風の彫刻

大巳貴命大鷲退治（おおなむちのみこととおおわしいじ）の彫刻です。

能登国七尾で大巳貴命は

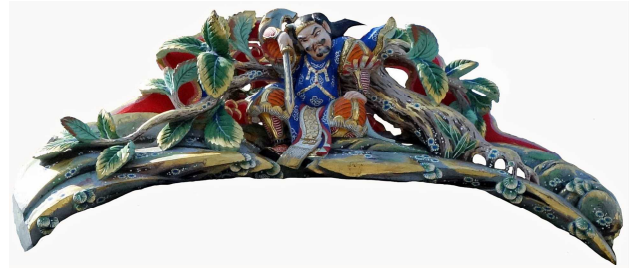
老翁夫婦に饗応され、国土と人民を守るよう懇願された。

あるときこの国（能登）に大鷲が棲みつき住民を殺し、家畜を損傷させた。

大巳貴命は鳳凰に乗って速やかに現れ退治した。

中近では鷲（おとり）明神

の大鷲退治と伝わっており、お西様（台東区、長國寺）の鷲妙見のお札に基づくものと思われます。



後面唐破風の彫刻

日本武尊の土蜘蛛退治の彫刻です。

中近では、戸隠明神の土蜘蛛退治と伝わっています。どんな物語なのかは不詳です。



左側面唐破風の彫刻

中近では、山幸彦と豊玉姫の話「山幸彦の還幸」と伝わっていますが、浦島太郎と乙姫様（竜宮伝説）ともいわれています。

どちらの話も、必ず一度は耳にした物語だと思います。

ただ、浦島の物語は、神話の「海幸彦と山幸彦」に基づいています。





## 飛 龍

龍は一般的に吉祥の靈獸といわれ、海や川、湖沼などに棲むとされています。

「百瀬の滝を登りなば、たちまち龍になりぬべし．．．」これは耳に馴染んだ唱歌「鯉のぼり」の第三節で、龍門と呼ばれる急流を登り切った鯉はそのまま空に舞い上がって龍になるという中国故事から来ている事は周知の事と思います。

天空を走り雲を起こし、雨や風を呼ぶとされ、勢いのある龍は好んで彫刻にも使われ、各地の社寺をはじめ、山車彫刻に盛んに取り入れられています。

こうした中に飛龍があり翼を持った龍として知られ、秩父では冬の本町屋台の水引幕が特に有名です。

多くの場合、躰は尾びれのついた魚の姿で表されますが、中近の腰支輪では龍の成長過程が克明に刻まれた大変珍しい作例を見せています。ここに順を追ってそのいくつかを紹介します・

例１は頭は龍ですが、尾びれ、胸びれのついた滝を登り切ったばかりの姿。まだ体からは火炎も発生していません。

例２は胸びれが翼状に広がり、火炎も発生し始めていますが、まだ尾びれのついた魚の姿です。

更に龍は成長を続け盛んに火炎を発生させながら、例３に見るように翼は鳥状に、尾は龍のそれに成長していきます。

爪も大きく発達し、もう龍そのものに成長する直前の姿です。

中近の腰支輪にはこのように成長する飛龍の姿が生き生きと刻まれています。

皆さまにも一度じっくり鑑賞して頂きたいと思っています。

例１は城の天守閣を飾る「鯢（シャチ）鉾」として知られています。天下人に登り詰めたという象徴です。



例  
1



例  
2



例  
3



## 秩父屋台囃子

秩父屋台囃子は、二百人もの曳き手の心を一つにまとめ、士気を鼓舞します。

全国でも比類の無い勇壮な祭り囃子として知られています。

屋台囃子に使用する楽器の構成は、中近の場合、

大太鼓	一
小太鼓	四（笠鉦の時 三）
摺鉦	一
篠笛	一

祭礼当日の笠鉦内の楽器の配置は、大太鼓を笠鉦前方の登勾欄（こつぎらん）の裏側の空間に麻縄で吊り込み、小太鼓は、四個が床に水平になるように、木枠に固定し、笠鉦の後方に縦一列に配置します。

太鼓の設置作業は「太鼓吊り」といい、大祭前日の十二月二日の午後に行われます。

笠鉦には、常時十八人前後が乗り込んで屋台囃子を演奏します。

屋台囃子の曲目は、笠鉦が前進する時、大太鼓によって絶え間なく演奏される「屋台囃子」（中近では単に「大太鼓」といいます）と、笠鉦の方向転換の時だけ小太鼓によって演奏される「玉入れ」の二種類です。

屋台囃子の演奏は、小太鼓が四打のリズムを刻み、これが他の楽器の基本リズムとなります。演奏のリードは、終始大太鼓が行い、これに合わせて摺鉦と篠笛が演奏されます。

小太鼓の演奏は四人同時に行いますが、大太鼓の演奏は一人で行い、二三分で次々と交代します。力強い大太鼓の大波、小波の打ち込みは腹の底から揺さぶられ、聴いているだけで全身に力が漲ります。

屋台囃子の奏法は、屋台町毎に特徴が見られますが、特に中近では、大太鼓の演奏者の独奏的な要素が強く、それぞれの叩き手は、自身身の屋台囃子を即興的に組立てて、個性豊かな演奏を行います。

このため、笠鉦の中で屋台囃子を演奏する様子は、腰幕や彫刻などに遮られて外から見る事が出来ませんが、大太鼓の音を聞くだけで、誰が叩いているのか、演奏者同士で識別出来るのです。



## 中近、幸運の反転巴

秩父地方の屋台、笠鉾の多くは極彩色の彫刻と金色に輝く飾金具に飾られており、上、中、本、宮等々金具の多くには、町会の一文字が刻まれています。

夜祭りの下郷の「志」のように頭文字を使って好印象を与える工夫や夏祭りの番場のように、「は」を用いて濁音を清音にかえる工夫とともに番の字の簡略化に努めている町会もあります。

このように町名金具にも様々な特徴が見られ興味深いものですが、こうした中で中近にはどこを探しても一枚の町名金具も見当たりません。笠を含めて文字金具の代わりに全て大小の巴紋で統一されています。

これは、中村町内に鎮座する八坂神社の社紋と同じで、三つ巴の神紋です。

当社は小さな祠ですが、その存在は大きく毎年七月二十日の川瀬祭り当日は昭和五十年代に至るまで神輿に供奉した屋台、笠鉾は当社を中心に曳き揃えられていたのです。

中近も古くはこの社前で道路を塞いで組立てられ、今も夏冬の大祭には社前に大幟が立てられます。



このように大祭と深く係わってきた社紋と中近の飾金具が同一の紋様であることは、大変意義深いものと考えられます。

それはさておき、よく見ると通常の三つ巴とは配置が逆のいわゆる逆さ巴が目につくはずで、ポツリポツリ配されている事がわかります。

これが「繁栄の逆さ巴」で、ポツリポツリ配されている事がわかります。

そして問題の「幸運の反転巴」。これは全体で唯一枚だけで巴の向きが逆になっています。今度中近を見るときは是非探して見て下さい。逆さ巴と反転巴を自分の目で。ヒントは比較的探しやすい位置にあるという事です。

社前の大幟は、**神依人之敬増威、人依神之徳添運**、と大書されています。

これは御成敗式目（鎌倉時代）の冒頭の一文で、神は人の敬いによって威を増し、人は神の徳によって運を添う。と言う意味です。

一、神社を修理し、祭祀を専らにすべき事

右、神は人の敬いによって威を増し、人は神の徳によって運を添う。然れば則ち恒例の祭祀は陵夷（衰退）を致さず、如在（神を祭る）の礼奠（供物）は怠慢せしむるなかれ。これによって関東御分の国々ならびに庄園に於ては、地頭神主ら各その趣を存し、精誠を致すべきなり。兼てまた有封（封戸のある）の社に至つては、代々の符（太政官符）に任せ、小破の時は且修理を加へ、もし大破に及び子細を言上せば、その左右（状況）に随てその沙汰（指示）あるべし。

幸運の反転巴

繁栄の逆さ巴

三つ巴（通常）



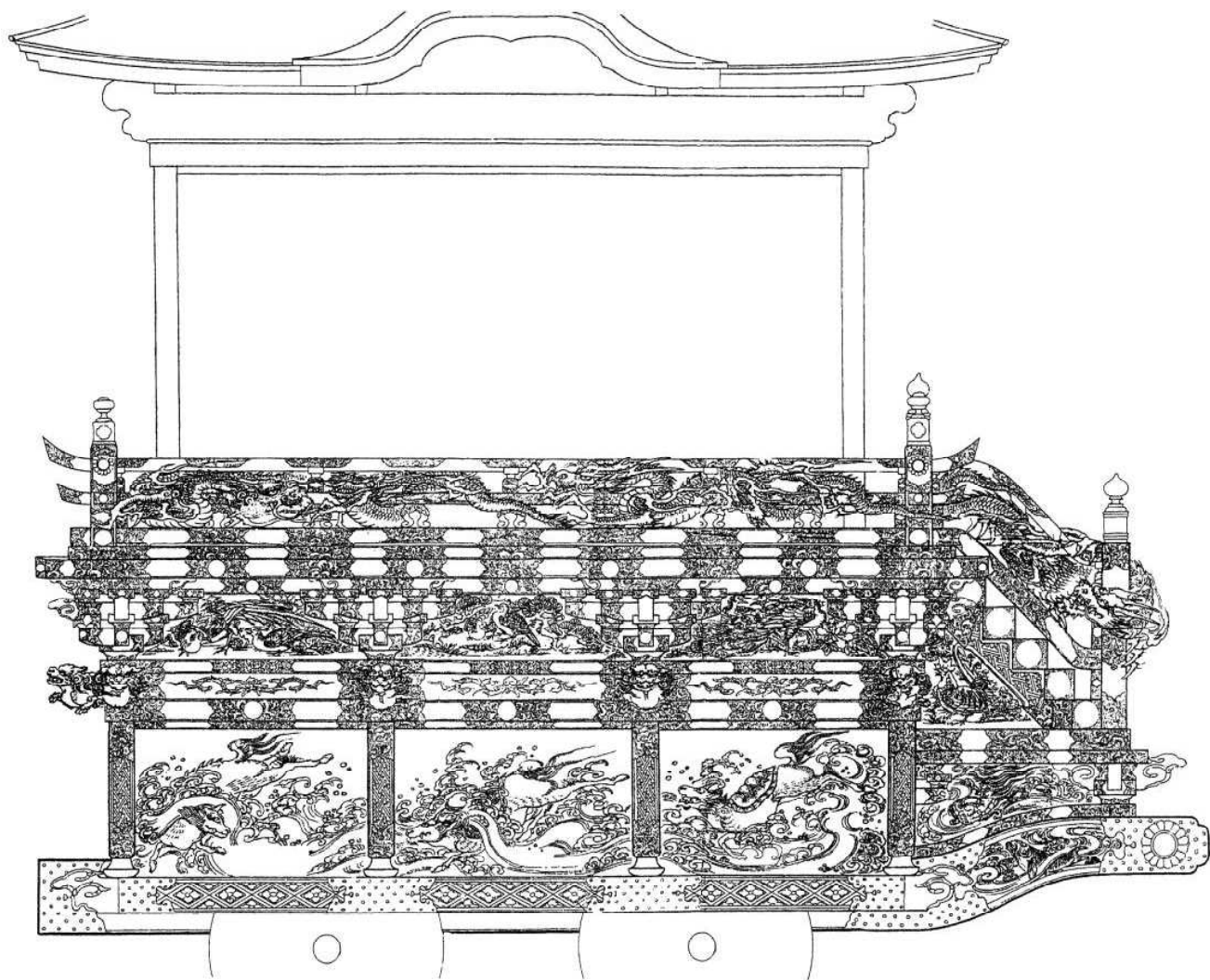




中 中  
近 近  
笠 近  
鉾 町  
保 存  
存 会  
会 会



一 番 組



## 参考資料

台東区指定有形民俗文化財（屋台図）

東京都浅草橋・人形店『吉徳』所蔵

長く原舟月（人形師）作、川越鍛冶町屋台とされてきましたがこの程、中近笠鉾の原図と判明しました。

現行笠鉾とは相違も見られ、完成までの試行錯誤が窺えます。

東京新聞の記事によると（令和元年十一月六日朝刊）

東京都浅草橋の老舗人形店「吉徳」保管の絵図  
秩父夜祭りの中近笠鉾の原図であったことがわかった。

この原図は、竜の頭や形・口の開きかたなどから、玉井村（現熊谷市）を拠点として活躍していた彫刻師「小林流一門」により書かれたと分析された。

当初絵図は、1997年に川越市立博物館での企画展において「川越鍛冶町屋台図」として出展されていたが、それを見た中近町会関係者が中近笠鉾ではないかと推測していた。

今年七月に関係者らが中近笠鉾の写真と絵図を照合して笠鉾の原図だと確認された。

絵図は笠鉾の建造時期に照らして1880年～1894年（明治13年～明治27年）ごろに書かれたと推測。

この計画作図に書かれている、獅子の木鼻・腰羽目・斗組・琵琶板・向拝宝珠柱の巻き龍・建つ土台地紋などは現笠鉾には存在しない。